

子や孫に安全な社会をつくろう

(2015年3月11日)

東日本大震災から4年の3月11日。「原発ゼロ」を求める小泉純一郎元首相が福島県喜多方市で講演し、安倍政権の原発再稼働方針について「本当にあきらめる」などと批判した。今も変わらぬ「小泉節」を報告する。(時事通信編集委員 村田純一)

その日、福島県会津地方には積雪50センチの大雪が降った。在来線の一部は運休し、高速道路も通行止め。太陽光エネルギーの発電会社「会津電力」に招かれた小泉氏の講演は雪の話から始まった。

「住んでいる方の日常生活は大変ですけど、たまに雪景色を見るとききれいですね。雪を見ると感銘を受けた和歌を思い出す。昭和21年正月、敗戦から半年もたっていない。歌会始が皇居で行われた。その時、昭和天皇が次のように詠まれた。

降り積もる深雪に耐えて色変えぬ 松ぞ雄々しき人もかくあれ

皇居の庭に何百本という松が植えられている。松は常緑樹で色を変えない。動じない。(日本は戦争で敗れたけど、打ちひしがれることなく、松のように雄々しく国民も頑張ってくれ、と思いを込めた歌だと思っています。

地震、津波、原発事故による大災害。何万人もの方が命を落とされ、いまだに行方不明(の人がおられる)。あの災害にめげず、ピンチをチャンスに変えてやろうと立ち上げたのが、会津電力だと思いました。くじけない。この大災害のピンチを何とかチャンスに変えられないか。もう原発はやめよう。自然界に無限にある太陽光、風、水、植物、地熱、そのような自然のエネルギーをこれからの福島に生かしていこうと、自分たちの子や孫に安全な社会をつくろうと思って、いま努力されている」

小泉氏は会津電力の取り組みに感銘を受けたことを語った後、本題に入った。

「私は今でも『首相在任中、原発推進していたじゃないか。辞めたら(原発)ゼロにする(と言うのは)、無責任じゃないか』という批判を受けている。『原子力はこれから日本にとってなくてはならない電源。日本に資源はない、経済成長を遂げるためには原発はなくてはならないものだ』という専門家の話をうかがい、『その通りかなあ』と思って推進してきた。

原発推進者が言ってきた主なものが3点ある。

原発は安全だ。事故を起こさない

原発のコストは他の電源に比べて一番安い。

原発はクリーンエネルギーだ。

この三つそろった産業は経済成長に欠かすことができない、日本がぜひとも進めていかなければならない大事な産業だ、ということを受けていた。

しかし、4年前。この地域での地震、津波、原発事故を見て、専門家が言ってきたことは違っているのではないかと思い始めた。自分なりに書物を読んだり、専門家の意見を聞いたり、調べていくうちに、分かってきた。

原発は安全、コストは安い、クリーンエネルギー。これらは全部ウソだ！ということが分かった。よくもこういうことをいまだに政府は言っているな、とあきれている」

「原発を導入してから約50年が経過した。1979年、米国のスリーマイル島で事故を起こした。いまだに人が住めない。1986年、ソ連のチェルノブイリで事故を起こした。いまだに帰れない。ふるさとを壊された。

いや、日本は違う。日本の技術者はレベルが高い。日本人は誠実だ。技術力も高いし、日本の原発は安全だ。違うと思ったところ、あの事故。4年たって、いまだに事故の原因究明がきちんとされていない。50年間に3回も大きな事故を起こして、何十年も人が住めない、帰れない。技術的なミス、人為的ミスも含む故障や事故は枚挙にいとまがない。

核燃料を燃やしたゴミを(再び)燃料に使う「核燃料サイクル」はとっくに完成しているはずが、(施設の稼働は)延期に延期を重ね、今は中止している。これで安全と言えるのか。もとより絶対安全な産業はない。『飛行機の方が事故は起きる。自動車事故だってしょっちゅうあるじゃないか。それに比べると(原発は)安全だ』と言うが、原発事故はひとたび事故を起こしたら取り返しがつかない。

(原発を)早く再稼働させようという動きが顕著になってきた。九州電力(川内原発1、2号機の再稼働に向けた申請)に対して、原子力規制委員会の(田中俊一)委員長が新しい基準に合格したと(言った)。しかし、委員長は『安全とは言えない』と言っている。にもかかわらず、政府は『原発は安全だ』とし、できるだけ早く再稼働させたいと準備させている。再稼働させると言ったって、『安全とは言えない』というのに、どうして安全と言えるのか。

しかも、(政府は)日本の原発の安全基準は世界で一番厳しいと言いながら、米国、フランスの原発と比べ、どこが一番厳しいのか一つも説明していない。

世界の人はみんな言っている。『日本の原発、一番テロに弱い』。テロであの米国の世界貿易センターみたいなことをやられたら、もう日本の原発はおしまいだ、福島どころ(の被害)ではすまないと言っている。一番厳しいなら、他の国と比べどこが一番厳しいのか国民に説明があってしかるべきだが、何も無い。それでまた再稼働させようとしている。あきれぬね」

「(原発の)コストが一番安い。これもなかなか経産省や電気事業連合会は直そうとしない。何でコストが安いのか。とんでもない。一番コストがかかるのが原発だ。被害者に対する賠償。『原発会社』だけで負担しきれない。廃炉するにしても、40年、50年もかかる。さらに原発の立地自治体に設置を了承してもらうため、ばく大なお金をかけないといけない。ちょっと考えると、こんなにカネのかかる原発が電源のコストが一番安いと、よく言えるなど。

安倍晋三首相が防護マスクをして、防護服を着て、福島(第1原発)の視察に来たとき(2013年9月19日)、1日約3000人の作業員が汚染水対策をしていると報じられていた。今は6000、7000人ぐらいの作業員が福島原発で除染作業などを進めている。

あの防護服は使い回しできない。毎回新しい防護服に着替えなければならない。その費用だって大変だ。この防護服をどうやって処理するかまだ確定していない。こういうことを考えただけでも、原発のコストが一番安い、クリーンエネルギーだ(と言うのは)、とんでもない。

今、民間金融機関は『原発会社』に融資しない。なぜか。不良債権(になる)と分かっているから。事故を起こしたら廃炉。いつ倒産するか分からない。政府が保証しない限り民間金融機関は融資しない。安全じゃないと分かっている(からだ)」

◇核のゴミの最終処分は？

「核燃料を燃やして電力を供給するときに出る際の核の廃棄物。いわゆる核のゴミ。このゴミの最終処分場は日本だけじゃなく、世界で一つもいまだに完成していない。

フィンランドのオンカロでもうじき最終処分場が完成するというので、一昨年視察に行った。岩盤の島400メートル地下に2キロ四方の広場をつくっている。そこに、円筒形の筒をつくり何重も防御して核のゴミを埋め込む。それでも原発2基分しか処分できない。まだ検査しなければならないという。岩盤の壁に少し湿気がにじんでいて、水分が漏れる可能性がある。水が漏れたら汚染水が地下に浸透する。10万年後も水が漏れないか、審査が残っている。

放射能は人間にとって色がみえない。においがいい。しかし、近づけば必ず死ぬ。だからここは絶対掘り出してはいけないと、危険な地域だと(最終処分場の)入口に書かなければいけないが、英語、フランス語、ドイツ語、国連の公用語を書いても、千年、万年後に人類が読めるか。(フィンランドでは)どう書くか、真剣に考えている。

今の原発、クリーンエネルギーでCO2を出さないという。確かに核燃料を燃やす時はCO2を出さないが、原発産業全体の地域では油、天然ガス、石炭を使ってCO2を出している。原発産業は全部沿岸にある。核燃料を燃やすとき熱が出る。冷却水で冷やさなければならない。海岸の水でパイプを使って冷やす。大量の水を取り込むため、プランクトンや微生物が大量に吸い込まれ、パイプを長年使うと、プランクトンや微生物の死骸がパイプに詰まる。その死骸を溶かすために薬品を使う。冷却水のあとに温水を大量にまた海に流す。海の温度が変わり魚の生態系が変わる。海の生態系を壊している。クリーンでも何でもない」

「(私が首相の時)核のゴミの捨て場を決めなかったのは政治の怠慢だと(言われる)。原発を再稼働させればまた核のゴミは増えてくる。今までの核のゴミも捨てる場所が決まらない。そういう中で、政府が(最終処分場の設置場所を)決めるから(地元自治体は)OKしろと、そんな風に考える方が私は無責任で楽観的だと思う。

中間貯蔵施設をつくるにしても、もうこれ以上(核のゴミを)増やさないと宣言をした方が、国民が協力しやすい環境がつかれるんじゃないか。いまだに最終処分場は一つもできていない。4年前に起きた汚染土

や除染のゴミ。汚染水コントロールされているとか、どなたか言っていたけど、全然(コントロール)されていない。よくもああいうことが言えるなと思っている。

あのタンク(の汚染水)。どこへ捨てればいいのか。防護服どこにどうやって捨てればいいのか。放射線が出るから燃やすこともできない。捨て場所も決まっていない。本当にあきれれる。

日本はもう1年半、原発ゼロでやっている。暑い夏も寒い冬も原発ゼロで停電一つ起こらない。ドイツやデンマークやスペインは自然再生エネルギーに対する依存度は20%を超えている。今、日本は数%。やればすぐに20%、30%自然再生エネルギーでやっていける。太陽、風、バイオマス、地熱、さまざまな自然の無限にあるエネルギーを使って、原発依存度を自然再生エネルギーでまかなえる可能性は十分ある。

◇政治が「原発ゼロ」にかじを

日本はいつもピンチをチャンスに変えてきた。敗戦後(がそうだ)。東京大空襲、広島・長崎に原爆。300万人以上の国民が命を落とした。しかし屈しなかった。満州、朝鮮、台湾を失って、戦前より発展してきている。最大の敵の米国を最大の味方にした。石油ショックがあったからこそ環境先進国になった。政治が原発ゼロにかじを切れば、必ず自然エネルギーで経済成長できる国になると思う。

この原発ゼロの社会は今よりも必ず良い社会になると思う。政治が決めればできる。政治が決めれば、企業も国民も協力する一つの大きな課題が原発問題。何千年、何万年も(残る)ゴミが出続ける産業から撤退し、クリーンなエネルギーを使って、自然を壊さない、自然と共生できる社会をつくるために少しでもできることをやらなければいけない。必ずやればできる。実現可能な大きな目標が原発ゼロの社会だと私は思っている。原発ゼロの社会は、やればできる夢のある事業だから、若者も、男だけでなく女性も、高齢者も大きな夢の実現に向けて努力しなければいけないと思う」

◇安倍首相？「指導者として惜しいね」

講演後、小泉氏は記者団の取材に対し、重ねて政治決断の必要性を強調した。

「原発ゼロを政治が判断すれば、国民も企業も大方支持する環境にはあると思う。その環境を生かしていないというのは惜しいよ。政治的判断として。久しぶりにピンチをチャンスに生かせる環境は整っている。これを生かしてほしいね」

—安倍首相が(原発ゼロを)決断できない理由は？

「それが分からないんだ。総理もいろいろあるし…分かんないね」

—日本は再生エネルギーでは劣等国になっているというが、その理由は。

「やればできるのにやろうとしないことだ。洞察力が足りない。判断力が落ちている」

「今、安倍首相が原発ゼロと(言う)、これはやっぱり状況は変わってね。原発は安全でもない、コストも安くない、クリーンエネルギーでもない、と分かったからゼロにしよう(と言う)、自民党の多数は協力するし、野党も協力する。一国の指導者として、日本が自然エネルギー大国になる環境が整っているにもかかわらず、やらないのは惜しいね」